神奈川新聞　2012年（平成24年）11月25日　日曜日

# 挑戦続けたロマンの人

## 満洲浪漫

大島　幹雄　著

長谷川4兄弟の中で一番有名なのは長兄の海太郎だろう。林不忘など三つのペンネームを使い分け、「丹下左膳」他のヒット作を残した人気作家だ。次兄の潾二郎は画家、四男四郎も作家。そして本書の主人公、三男の濬は詩人にしてイベンターだった。

兄海太郎に比べて知名度はいまひとつの濬だが、人生の波乱万丈さでは負けてはいなかった。米国各地を放浪した長兄に対して、濬は満州（中国東北部）に渡っている。当初は官僚になるはずだったが、満州文化の中心たるべく設立された満洲映画協会（満映）に入社した。

ロシア語に堪能で、バイコフのベストセラー「偉大なる王」を翻訳し、文芸誌「満洲浪漫」を創刊、詩や小説を発表するなどの活動もしていた。王道楽土・五族協和のスローガンを信じ、本物の満州文学を創出したいと願った。また白系ロシア人の村落で共同生活を試みるなど、ロマン主義気質を存分に発揮している。当時の濬を知る人は、彼のことを「桁外れに不適格の人」「豊かな詩情に恵まれた人であるのに、あまりにも天衣無縫であった奇人」と評する。

やがて敗戦で満州国が崩壊する。満映理事長だった甘粕正彦（大杉栄を殺害した元軍人）は自殺、濬はその場に立ち会った。ソ連軍の侵攻や八路軍の進撃から命からがら逃れて内地に引き揚げるが、その過程で幼い娘を失う。引き揚げ後の困窮生活の中で長男も病気で死なせてしまう。

1956年、新たなチャンスが巡ってくる。興行師の神彰と共にロシアからドン・コサック合唱団を招聘する企画を立ち上げたのだ。さまざまなアイデアを出し、得意の語学で交渉に尽力した濬だったが、公演が実現する頃には結核の再発で入院し、成功を逃してしまう。いい線までは行くのに、もう一歩のところで挫折してしまう宿命らしかった。

成功は得られなかったものの、何度も挑戦を続けた大ロマンの人、長谷川濬の生涯は、魅力と可能性に満ちており、成功者のそれとは一味違う、深い感銘を受ける。

（文芸評論家・長山　靖生）

（藤原書店・2940円）